

## 他者の羞恥表出が観察者の動機に与える影響

—否定状況および肯定状況における検討—

福田哲也・樋口匡貴

The effect of embarrassed facial expressions on observer motive

Tetsuya Fukuda and Masataka Higuchi

This study had two purposes: first, we investigated whether the effect of embarrassed expressions on observer motive varied as a result of the situation that caused the embarrassment, and second, we investigated whether observer motive differed by type of embarrassed facial expression. Participants read scenarios in which a friend was either positively or negatively evaluated by a third person and the friend expressed one of four types of facial expression: three embarrassed and one neutral. Participants were then asked questions that explored their motive to act on behalf of themselves, on behalf of their friend, and to attempt to recover the disrupted social interaction. In order to examine whether the effect of embarrassed expression on observer motive varied according to the situation that resulted in the embarrassment and whether observer motive differed by type of facial expression, two-way ANOVAs, simple main effect analysis, and multiple comparisons were conducted. Results revealed that the interactions of situation and facial expression type were significant on all observer motive. Moreover, there were significant differences in each observer motive between types of facial expression when the friend was positively evaluated; however, no such differences were found when the friend was evaluated negatively. These findings suggest that the effect of embarrassed facial expressions on observer motive is differed by the situation that caused the embarrassment, and that the effect of facial expressions on observer motive exist in only under conditions of positive evaluation.

キーワード : Embarrassment, facial expression, observer motive

### 問 題

羞恥とは、社会的に受け入れられない自己像や他者に馴染みのない自己像が露呈した時など自身が苦境におかれていることを意識した際に生じる感情である（福田, 2014）。これまでに行われてきた先行研究（e.g., Keltner, 1995; 菅原, 1998）から人は羞恥を感じた際に特徴的な表情を示すことが明らかとなっている。こうした表情を示すことによって人は自身が羞恥を感じていることを他者、

すなわち観察者に伝達する。

羞恥の表出には社会的な機能があり、観察者から何らかの行動を引き出すことが先行研究から示されてきた。例えば、Feinberg, Willer, & Keltner (2012, Study 4, Study 5) や Dijk, Koenig, Ketelaar, & de Jong (2011) では、信頼ゲームにおいて相手が羞恥表情か無表情かによって観察者の資源分配行動が変化することが示されている。またゲーム場面だけでなく日常場面においても、他者の羞恥表出場面において観察者は、表出者をなぐさめる・気を紛らわせるといった援助、表出者から離れる・自分だけその場を立ち去るといった放置、表出者をからかう・茶化すといったユーモア化、周囲の人の様子を見るという観察の4種類の行動をとることが示されている(福田・樋口・蔵永, 2014)。

観察者が表出者に何らかの行動をとる理由に関わる説明として、Goffman (1967 浅野訳 2002) の羞恥に対する説明が存在する。Goffman (1967 浅野訳 2002) の羞恥に対する説明は以下のようなものである。人は社会的相互作用の場面において役割や方針を持っているが、何らかのきっかけが生じ、ある人がそれらを果たせなくなったり維持できなくなったりすると社会的相互作用が停滞する。その時に生じるどうしたらよいかわからないという感覚が羞恥である。Goffman (1967 浅野訳 2002) の説明においては社会的相互作用の停滞が羞恥の発生因であるため、最初に役割を果たせなくなったり方針を維持できなくなったりした人物(=表出者)だけでなく、その場にいる周囲の人物(=観察者)も羞恥を感じる可能性がある。このように自身も羞恥を感じる可能性があるため、観察者は何らかの対処的な行動をとるということが指摘されている(菅原, 1998)。

Goffman (1967 浅野訳 2002) の説明は、他者の羞恥表出時には観察者自身が羞恥を感じる可能性があるため何らかの行動をとるというものであり、その場面での観察者の行動の動機は観察者自身のため、表出者のため、場をおさめるため、という3種類に分類することができるだろう(福田, 2014)。まず観察者は、自身が羞恥を感じる可能性がある場合、それを回避するために行動をとる可能性がある。そのため、観察者自身のためという動機を想定することができる。一方で、観察者は社会的相互作用の停滞を回復させるため、また表出者を立ち直らせるために行動をとる可能性がある。停滞した社会的相互作用を回復させたり表出者を立ち直らせたりすることは、羞恥の原因やさらにその大元の原因を解消することであり、結果として観察者さらには表出者の羞恥を取り除くことにつながるためである。したがって、表出者のためという動機や場をおさめるため(=社会的相互作用を回復させるため)といった動機を想定することができる。

このように他者の羞恥表出時に生じる観察者の動機は3種類に分類できると考えられるが、観察者に生じる動機は、表出者が示す表情の種類によって異なる可能性が考えられる。例えば、表出者が辛そうな表情をしていれば観察者には表出者のためという動機が強く生じる可能性がある。一方、表出者が平然とした表情をしていれば、観察者には自分のためという動機が生じるかもしれない。前段落で整理した3種類の動機は観察者の行動を方向づけるものである。そのため、観察者の動機に対する表情の影響や表情の違いにより生じる動機の具体的な違いを明らかにすることは観察者がなぜその行動をとったのかという点を説明する際に役立つだろう。したがって、観察者の動機に対する表出者の表情の影響、および表情の違いによって生じる観察者の動機の違いを検討する必要があるだろう。

しかしながら、観察者の動機に対する表出者の表情の影響を検討する際には、表情が示される状況を考慮する必要があるだろう。表出者の表情に対する観察者の判断や読み取れる感情の推測は、表情とその表情が示される状況との組み合わせによって変化することが示されている (Carroll & Russell, 1996; 福田・樋口, 2014)。例えば、ある状況において辛そうに見える表情でも、他の状況においてはそう見えないということである。こうした先行研究の知見を踏まえると、表情によって引き出されるであろう観察者の動機も結果としてその表情が呈示された羞恥状況によって変化する可能性がある。

そこで本研究では、次段落以降で述べるような複数の羞恥状況と複数の表情を用い、まずは観察者の動機に対する表情の影響が、羞恥が生じる状況によって異なるのかを検討する。そして次に、状況ごとに観察者の動機に羞恥表出が影響するのか、またどういった表情がどの動機を引き出しやすいのかを探索的に検討する。

本研究では羞恥表出の刺激として福田 (2014) や福田他 (2014) で用いられた 4 つの表情と同様の特徴をもった表情を用いる。この 4 種類の表情は、菅原 (1994, 1998) で示された 3 つの羞恥表情と福田他 (2014) で作成された無表情から構成されている。菅原 (1992) は、羞恥感情の構造を整理し、ハジという感覚とテレという感覚の 2 つから羞恥が構成されることを述べている。そして菅原 (1994, 1998) が示した 3 つの表情は、ハジの感覚を強く表すハジ表情とテレの感覚を強く表すテレ表情、ハジとテレの両方の感覚を表すハジ+テレ表情の 3 種類で、ハジとテレの感覚に基づいたものである。羞恥という感情がハジとテレという 2 つの感覚から構成されるという菅原 (1992) の指摘を踏まえると、この 3 種類の表情は羞恥を示す上で必要十分な表情だと考えることができる (福田他, 2014)。

また、人が羞恥を感じる状況は、表出者が周囲の他者に否定的な印象を与えたと感じる状況と肯定的な印象を与えたと感じる状況の 2 つに分類できることが指摘されている (菅原, 1998)。そこで本研究では、上述の 4 つの表情と組み合わせる状況として福田 (2014) と同じく、菅原 (1998) の羞恥状況の分類に対応した表出者に人前で否定的な評価が与えられる状況と人前で肯定的な評価が与えられる状況の 2 つを用いる。

## 方 法

**対象者と手続き** 大学生 330 名 (男性 87 名, 女性 240 名, 性別不明 3 名; 平均年齢 20.20 歳) を対象に集合調査法・宿題調査法を用いた質問紙調査を行った。先述の 2 種類の羞恥状況と 4 種類の表情を組み合わせた 8 種類の場面を作成し、そのうちのいずれかの場面を調査対象者に呈示した。

**呈示した場面** 呈示した場面は、顔や名前は知っているがあまり話したことのない同性の友人が授業で発表を行い、授業終了後にまだ学生の大勢残っている教室で先生からコメントを受けてある表情を示す、というものであった。状況の操作は、呈示した場面において友人が受けるコメントを変化させることによって行われた。人前で否定的な評価を与えられる状況 (否定状況) では、友人は先生から“君の発表は全然わからなかった。あれではダメだよ”というコメントを受けた。一方、人前で肯定的な評価を与えられる状況 (肯定状況) では、友人は先生から“君の発表はわかりやす

くて、とても良かったよ”というコメントを受けた。

先生からのいずれかのコメントを受けた後に表出者である友人が示す表情は、福田（2014）や福田他（2014）と同様の特徴を持った4種類の表情のいずれかであった（Figure 1）。この4種類の表情の内訳は、菅原（1994, 1998）が示した典型的なハジ表情、テレ表情、ハジ+テレ表情と同様の特徴を持つ3種類の羞恥表情と福田他（2014）と同様の特徴を持つ無表情であった。

なお、本研究で用いたすべての場面において表出者は“顔や名前は知っているがあまり話したことのない同性の友人”という観察者との心理的距離が中程度の人物であった。これは、表出者が観察者との心理的距離が遠い人物（例えば、見知らぬ人）の場合、表情に関わらず表出者のためという動機が生起しない可能性が考えられるためである。一方、表出者が観察者との心理的距離が近い人物（例えば、親友）の場合、表情に関わらず表出者のためという動機が高まる可能性があるためである。

**質問項目** 調査対象者には、呈示した場面において自分が何か行動するとしたら、何のために行動するのかについて尋ねた。質問項目は、自分（観察者自身）のためという利己動機、友人（表出者）のためという利他動機、場をおさめるためという場面修復動機の3種類で、それぞれ5項目を自作し、測定に用いた（Table 1）。回答は、“1. あてはまらない” - “5. あてはまる”の5件法であった。なお、本研究では動機以外の項目についても測定を行ったが、本研究では分析対象としなかったため、詳細については記載しないものとする。測定した項目の一部は福田（2014）で分析に用いられた。

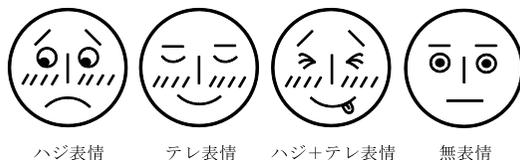


Figure 1. 本研究で用いた4種類の表情

Table 1 本研究で用いた質問項目	
利己動機 (観察者自身のため)	自分の気分を良くするため 自分が辛くならないため 自分の居心地が悪くならないため 自分が嫌な気持ちにならないため 自分が不愉快にならないため
利他動機 (表出者のため)	友人の気分を良くするため 友人が辛くならないため 友人の居心地が悪くならないため 友人が嫌な気持ちにならないため 友人が不愉快にならないため
場面修復動機 (場をおさめるため)	その場の雰囲気を悪化させないため その場を落ち着かせるため その場の空気を元に戻すため その場を丸くおさめるため その場の雰囲気を良くするため

## 結 果

**欠損値の処理および分析対象者数** 得られたデータに関して、3つの変数を構成する各5項目のうち、1項目のみ欠損の場合は、残りの4項目に対する同一回答者の回答の平均値を代入した。各変数を構成する5項目のうち2項目以上欠損があった回答者は分析から除外した。また、過去10年間で最も長く住んだ国を日本以外と回答した人物も分析から除外した。その結果、最終的な分析対象者は312名（男性82名、女性230名；平均年齢20.16歳）であった。条件別では、否定状況では162名（ハジ表情40名、テレ表情43名、ハジ+テレ表情40名、無表情39名）、肯定状況では150名（ハジ表情41名、テレ表情38名、ハジ+テレ表情34名、無表情37名）が分析対象者であった。

**状況と表情の組み合わせが観察者の動機に及ぼす影響** 測定した動機15項目が想定通りの構造を示すのかを検討するために確証的因子分析を行った。各条件のサンプルサイズを踏まえ、呈示した8つの場面をグループ変数とした多母集団同時の確証的因子分析を行わず、状況および表情それぞれをグループ変数とした2種類の多母集団同時の確証的因子分析を行った。なお、どちらの分析でも各因子間の共変関係を想定した。分析の結果、どちらの分析においても許容範囲内のモデル適合度が得られた（状況：GFI = .857, CFI = .890, AGFI = .802, RMSEA = .065, 表情：GFI = .811, CFI = .899, AGFI = .739, RMSEA = .046）。こうした結果から、本研究で測定した3種類の動機は、本研究で呈示したどの場面においても想定通りの構造を示している可能性が高いと考えられる。そこで、測定した15項目を変数ごとに加算平均し、利己動機得点（ $\alpha = .85$ ）、利他動機得点（ $\alpha = .83$ ）、場面修復動機得点（ $\alpha = .83$ ）を算出した（Table 2）。

観察者の動機に対する表情の影響が状況によって異なるのかを検討するため、状況と表情を独立変数、観察者の3種類の動機それぞれを従属変数とした2要因分散分析を行った（Table 3）。分析の結果、3種類の動機に対して状況と表情の交互作用が有意であった。

次に、各状況での観察者の動機に対する表情の影響および具体的に表情によって引き出される動機の違いを検討するため、各状況での表情の単純主効果の検定（Table 4）および多重比較を行った（有意： $\alpha = .05$ 、有意傾向： $\alpha = .10$ ）。

各状況での表情の単純主効果の検定の結果、利己動機得点は肯定状況においてのみ表情の単純主効果が有意であった。また、利他動機得点に対する表情の単純主効果は否定状況において有意傾向、肯定状況において有意であった。場面修復動機得点に対する表情の単純主効果は肯定状況において

Table 2  
状況表情別観察者の動機の平均値(SD)

状況	表情	利己動機	利他動機	場面修復動機
否定	ハジ	2.690 (0.886)	4.110 (0.684)	3.420 (0.970)
	テレ	2.484 (0.994)	4.126 (0.531)	3.693 (0.884)
	ハジ+テレ	2.606 (0.923)	3.765 (0.770)	3.635 (0.825)
	無表情	2.541 (0.947)	3.822 (0.973)	3.723 (0.741)
肯定	ハジ	1.971 (0.864)	3.273 (0.889)	2.917 (0.931)
	テレ	2.495 (0.946)	3.005 (0.788)	2.621 (0.778)
	ハジ+テレ	2.202 (1.058)	2.929 (0.993)	2.675 (0.808)
	無表情	2.632 (1.079)	3.595 (0.853)	3.632 (0.969)

Table 3

観察者の動機を従属変数とした2要因分散分析

	状況の主効果 ( $df = 1/304$ )			表情の主効果 ( $df = 3/304$ )			交互作用 ( $df = 3/304$ )		
	F値	p値	$\eta^2$	F値	p値	$\eta^2$	F値	p値	$\eta^2$
利己動機	5.477	.020	.017	1.030	.379	.010	3.057	.029	.028
利他動機	66.448	.000	.170	3.131	.026	.024	4.120	.007	.032
場面修復動機	44.359	.000	.116	6.796	.000	.053	5.185	.002	.041

Table 4

観察者の動機に対する各状況での表情の単純主効果 ( $df = 3/304$ )

	状況	F値	p値	$\eta^2$
利己動機	否定	0.349	.790	.003
	肯定	3.695	.012	.034
利他動機	否定	2.174	.091	.017
	肯定	4.956	.002	.038
場面修復動機	否定	0.995	.395	.008
	肯定	10.576	.000	.083

のみ有意であった。

多重比較の結果、利己動機得点は、否定状況において表情間に有意もしくは有意傾向な得点差は見られなかった。肯定状況においては、無表情の得点がハジ表情の得点よりも有意に高かった。また、ハジ表情とテレ表情の間に有意傾向な得点差が見られた。

利他動機得点は、否定状況において表情間に有意もしくは有意傾向な得点差は見られなかった。一方、肯定状況においては、無表情の得点がテレ表情やハジ+テレ表情よりも有意に高かった。無表情とハジ表情の間に有意もしくは有意傾向な得点差は見られなかった。また、ハジ表情、テレ表情、ハジ+テレ表情の間に有意もしくは有意傾向な得点差は見られなかった。

場面修復動機得点は、否定状況においてどの表情の間にも有意もしくは有意傾向な得点差は見られなかった。肯定状況においては無表情の得点が他の3つの表情の得点よりも有意に高かった。ハジ表情、テレ表情、ハジ+テレ表情の間に有意もしくは有意傾向な得点差は見られなかった。

## 考 察

本研究では、観察者の動機に対する表出者の表情の影響が羞恥状況によって異なるのか、また各状況での動機に対する表情の影響やどういった表情がどの動機づけを引き出しやすいのかについて検討を行った。

その結果、利己動機 (=観察者自身のため)、利他動機 (=表出者のため)、場面修復動機 (=場をおさめるため) という3種類の観察者の動機すべてに対して状況と表情の交互作用が有意であり、観察者の3種類の動機に対する表情の影響は状況によって異なることが示された。

さらに3つの動機得点は、否定状況においては表情の単純主効果が有意でなかったものの、肯定状況においては表情の単純主効果が有意であり、表情間に有意もしくは有意傾向な得点差が見られた。これらを踏まえると、肯定状況においてのみ、観察者の動機は表出者の表情の影響を受け、表情によって生じる動機も異なると結論づけることができる。以下からはこうした結果が得られた理

由について考察を行う。

本研究で測定した3種類の動機の特徴として、状況や表情を問わず、観察者自身のためという動機よりも表出者のため、場をおさめるためという動機の得点が高いことが記述統計よりわかる。定義で述べたように羞恥は苦境場面で生じる感情であり、問題において表出者だけでなく観察者も羞恥を感じる可能性を述べた。しかしながら本研究で用いた具体的な場面を踏まえると、苦境の度合いはただその場面を目撃しただけの観察者よりも評価を受けた表出者の方が高いと考えることができる。そのため、観察者は自身のためという動機よりも、表出者のため、あるいは場をおさめるためといった表出者の羞恥をとりのぞく方向に動機が生じたと考えられる。

また表出者のため、場をおさめるためという2つの動機に関して、否定状況においては表情が影響しないことが示された。否定状況は表出者に否定的な評価が与えられる状況であるため、観察者は表情に関わらず表出者が辛い状態にあると考えたのかもしれない。そのため、結果として表出者のため、場をおさめるためという動機には表情が影響しなかった可能性が考えられる。

一方、肯定状況においては、表出者のため、場をおさめるためという動機には羞恥表情が影響し、表情間にも得点の有意差が見られた。この2つの動機に関しては、テレ表情やハジ+テレ表情といった笑いを含んだ羞恥表情よりも無表情の得点の方が高いという点が共通していた。この点については以下のように解釈できるだろう。他者から褒められたという肯定状況において、観察者は、笑いを含む表情に対しては、その評価を受け入れて喜んでいると解釈した可能性がある。一方で、観察者は無表情に対してはネガティブな感情を感じているが表出していない、あるいはどうしてよいかかわからず固まっていると解釈した可能性がある。実際、人前で褒められた状況においては、無表情はテレ表情やハジ+テレ表情に比べて、怒りといったネガティブ感情に関しては高く感じていると評価されるが、喜びや嬉しさといった感情は低く感じていると評価されることが示されており(福田・樋口, 2014)、この解釈が支持される可能性が高い。こうした理由から肯定状況においては、無表情を示した表出者に対しては、表出者のため、あるいは場をおさめるためといった動機が観察者に相対的に強く生じたのかもしれない。なお、肯定状況でのハジ表情と無表情との関係については、表出者のためという動機においては表情間に有意な得点差がないものの、場をおさめるためという動機においては表情間に有意な得点差が見られていた。この点に関しては本研究の結果だけでは解釈することができない。そのため、こうした違いが生じた理由について今後検討する必要があるだろう。

本研究の結果、観察者の動機に対する表情の影響は羞恥が生じる状況によって異なり、表出者が褒められて羞恥を感じるような状況では、無表情が表出者のためあるいは場をおさめるためという動機を観察者から引き出しやすいことが示された。表出者の立場に立った場合、褒められて恥ずかしさを感じた時には、無表情を示すことで観察者に表出者自身の羞恥を取り除くための行動を動機づけることができると結論づけられるだろう。

最後に今後の課題について記述する。今後の課題として、本研究で扱った3種類の観察者の動機が観察者のどういった行動を予測、説明するのかを検討することが挙げられる。この点を検討することによって羞恥表出が観察者の行動を引き出すまでのプロセスをより詳細に明らかにすることが

できるだろう。

#### 引用文献

- Carroll, J. M., & Russell, J. A. (1996). Do facial expressions signal specific emotions? Judging emotions from the face in context. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 205-218.
- Dijk, C., Koenig, B., Ketelaar, T., & de Jong, P. J. (2011). Saved by the blush: Being trusted despite defecting. *Emotion*, **11**, 313-319.
- Feinberg, M., Willer, R., & Keltner, D. (2012). Flustered and faithful: Embarrassment as a signal of prosociality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **102**, 81-97.
- 福田哲也 (2014). 羞恥表出者に対する観察者の評価が観察者の行動に及ぼす影響 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学関連領域), **63**, 67-73.
- 福田哲也・樋口匡貴 (2014). 羞恥表出者に対する観察者の心的状態の推測—失敗状況および成功状況を用いた検討— 日本社会心理学会第 55 回大会論文集, 141.
- 福田哲也・樋口匡貴・蔵永 瞳 (2014). 羞恥表出者に対する観察者の評価および行動—表出者の表情による違い— 感情心理学研究, **21**, 80-90.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behaviour*. New York: Doubleday.
- (ゴフマン, E. 浅野敏夫 (訳) (2002). 儀礼としての相互行為〈新訳版〉 対面行動の社会学 法政大学出版局)
- Keltner, D. (1995). Signs of appeasement: Evidence for the distinct displays of embarrassment, amusement, and shame. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 441-454.
- 菅原健介 (1992). 対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究, **7**, 19-28.
- 菅原健介 (1994). 羞恥表情の構造に関する研究 日本心理学会第 58 回大会発表論文集, 103.
- 菅原健介 (1998). 人はなぜ恥ずかしがるのか：羞恥と自己イメージの社会心理学 サイエンス社  
(指導教員：森永康子教授)